

夏目漱石に関して



夏目漱石（1867年2月9日 - 1916年12月9日）

なつめ そうせき
夏目漱石は、明治から大正にかけての日本を代表する小説家です。もちろん、学校でも、漱石に関して今まで色々勉強する機会があったと思いますが、漱石は近代日本の文学を知る上で非常に重要な小説家なので、今回このような資料を作ることになりました。読むのが少し面倒かもしれませんが、一通り読んでみて下さい。

第 1 章

明治時代の文学界

夏目漱石は、上にも書いた通り、近代^{*1}日本の文学において非常に重要な存在です。どのように重要なのか、ということを知るために、まず、明治時代の文学界というものがどのような状況だったのかを見てみましょう。

1.1 明治以前の文学

明治以前の文学というものが、どのような状態だったのかを、ごく簡単に見てみることにしましょう。

1.1.1 漢文

まず、その頃に高尚^{こうしょう}な文学とされていたものが何かというと、「漢文^{かんぶん}」です。漢文というのは、もともと中国で書かれていた詩や小説、伝記^{でんき}や思想書^{しそうしょ}などを指します。

日本では、特に江戸時代に、武家中心の社会を維持するため、道徳^{どうとく}が重要視されていました。特に、中国の春秋時代^{しゅんじゅう}*2に活躍した偉大な思想家である孔子^{こうし}（紀元前 551 年 – 紀元前 479 年）の思想体系である儒学^{じゅがく}、そしてこの儒学を南宋^{なんそう}*3の思想家である朱熹^{しゆき}（朱子^{しゆし}）が再構築した朱子学^{しゆしがく}を学ぶことが奨励^{しょうれい}されていました*4。

儒学^{じゅがく}というのは「儒教^{じゅきやう}」とも呼ばれます。～教^{きやう}、と言うんですから、これはもう道徳

*1 ここで言う近代というのは、明治以後のこととします。元号^{げんごう}が明治に改められた（明治改元^{かいげん}）のが 1868 年 10 月 23 日のことですから、これ以降ということですね。

*2 紀元前 770 年 – 紀元前 403 年。

*3 1127 年 – 1279 年。

*4 まあ、こう書くと何か難しいことのように思われるかもしれませんが、儒学とか朱子学というものは、親兄弟^{うやま}を敬^{あやむ}い、主^{あるじ}の恩^{おん}を忘れるな、という教えが強いので、親子仲良く、国を支えているオサムライの恩^{おん}を忘れず暮らしましょう……みたいな優等生^{ゆうとうせい}的^{てい}態度^{たいど}が良^よしとされていた時代なわけです。

とか哲学てつがくではなくて宗教しゅうきょうになってるわけです。だから創始者である孔子は教祖 = 神様なわけで、あちらこちらに「孔子廟こうしびょう」という、孔子を祀る建物が作られて、その有り難い教えである『論語』は、まるでお経きょうを丸暗記するようにして覚えさせられました。

「寺子屋」という言葉を聞いたことがあるんじゃないかと思いますが、江戸時代には、今の学習塾じゅくのような感じでこの寺子屋が設けられていて、そこでは農民や町人の子弟に対して、習字や算盤そろばんと共に、『論語』*5の音読おんどくと内容の読解どくかいが教えられていました。お坊さんや浪人などが先生をすることが多かったようですが、そこに子供が集まり、最初は丸暗記から始めて、『論語』に収録されているような漢文を読まされていたわけです。では、このとき読まされていた漢文がどのようなものだったか、実際に『論語』から一例を挙げると……

(原文)

子曰 学而時習之 不亦説乎
有朋自遠方来 不亦樂乎
人不知而不愠 不亦君子乎

(読み下し文)

子曰く 学まなびて時ときに之これを習ならう 亦またよろこ説やばしからず乎
朋とも有あり遠方えんぽうより来きたる 亦またの樂やしからず乎
人ひと知しらずして愠うらみず 亦またくん君子しならず乎

これを現代語に訳すると、こんな感じでしょうか：

孔子は仰おっしやった。

「何かを学び、折おりにふれて思い返してはまた考えて理解を深める。

それは何と心うれしいことではないか。

「遠くに住む友が訪ねてきて学問について話を交わす。

それは何と楽しいことではないか。

「他人が理解してくれなくてもそれを気に病まない。

そうあろうとすることは何と気高いことではなからうか。」

*5 孔子と彼の高弟こうてい げんこうの言行を孔子の死後、弟子達が記録した書物のこと。

1.1.2 識字率

こんなものを勉強していたのか！と驚くかもしれません。まあ、最初のうちは意味も分からず丸暗記させられるんですが、昔から「読書百遍自ずから通ず」*6と言う通り、そのような学習を続けることで次第に読めるようになるわけです。このような難解な文章の読解、そして習字で書くことを習っていたために、江戸時代の識字率*7は男子の全国平均で50%程度、都市部に限定すると80%程度あったと言われています。

では、同じ時代のアメリカやヨーロッパではどうだったのか、というと、これらの国はキリスト教でしたから、日本における『論語』に相当するような、道徳的に内容を知ることが要求された本として聖書があったわけです。しかし、実際には、貧困層にまでそのようなものを読むための、そして必要なことを書くための、読み書きの教育が行き渡ること、一部の例外を除いては、19世紀後半にいわゆる義務教育制度がととのえられるまでありませんでした。

もちろん、これには例外もあります。たとえばアメリカ独立前後のニューイングランド*8では、全人口の90%の人が文字を読み書きできたといいます。この地域は「清教徒」と呼ばれる、道徳的に厳格なキリスト教徒が多かったために、聖書教育が行われ、このように識字率が高かったのだそうです。また、スウェーデンでは、1686年に定められた教会法 *kyrkolagen* で読み書きの教育が義務とされたために、18世紀にはほぼ全ての人が読み書きをすることができたそうです。

しかし、1841年のイギリスの調査によると、当時のイギリス人男性の33%、女性の44%が、自分の名前を書くこともできず、何かの契約をするときにはサインの代わりに自分を表すマークを書いていた、という記録が残っています。

政情不安なども、このような教育問題には大きな影響を与えます。たとえばフランスの場合、1720年代には60数%あった識字率が、フランス革命から恐怖政治時代、ナポレオンの台頭とナポレオン三世による第二帝政を経た1870年代には、なんとわずか数%にまで下落しています。

日本は17世紀から徳川幕府の統治によって政治が安定していて、寺子屋による初等教育が一般庶民にまで行き渡っていました。そのために、当時の世界の各地域と比較して、文句なしのトップクラスの識字率を誇っていたわけです。実は、この高い識字率が、日本

*6 「難しい書物でも、百回も読み返していたら、自然とその意味するところを理解できるだろう」という意味の諺ことわざですね。

*7 人口のどれだけの割合の人が文字を読み書きできるかを示す値。

*8 アメリカ東部・大西洋岸のカナダ国境に近い地域。メイン、ニューハンプシャー、バーモント、マサチューセッツ、ロードアイランド、コネチカットの6州から成る。

の文学というものに決定的な役割を及ぼしました。この時代、一般大衆の大多数が読み書きできた、ということは、そういう人々が楽しみのために本を読み、芝居を観、そして落語を聞いたりして楽しんでいただけで、このような社会情勢の中で、様々な大衆文学が生まれたのです。

1.1.3 教養としての古典的大衆文学

それでは、近代以前、具体的には江戸時代には、大衆はどのような文学を楽しんでいたのでしょうか。

まず、先に示したような漢文の知識をそのまま延長したものとして、漢文を楽しむことが挙げられます。漢文というのは、要するに中国語で書かれた文章ということですが、漢文が全て『論語』のような堅苦しいものだというわけではありません。むしろ、声に出して読むと美しい情景が思い起こされるような詩などが多いのです。

また、江戸時代の教養人は、漢詩を自ら作ったりもしていました。作るのは、これは漢文に関する高度な知識が必要なので難しいのですが、読んで味わうことは一般大衆でも（皆が皆できたというわけではないでしょうが）できたわけです。更に、このような漢詩に節をつけて歌う、ということがよく行われていました。詩などに節をつけて歌うのを「吟ずる」と言うのですが、漢詩を吟ずることを「詩吟」と言います*9。

もちろん、日本で発達した詩歌である短歌や連歌、連歌から発展した俳句や川柳というものも親しまれていました。短歌は、藤原定家が新古今和歌集までの歌集から百首の歌を選んだ『小倉百人一首』が、かるたとして広く大衆に親しまれていましたし、俳句に関しても、松尾芭蕉の『おくのほそ道』がよく知られていることから分かるように、やはり広く大衆に親しまれていました。

ただし、これらの文学は、それを純粋に楽しむ、というよりは、教養人が教養を楽しむ、というか、教養人が教養のあるところをアピールするというか、そういう「教養の……」という枕詞が付く感じですね。では、普通の人達が普通に楽しんでいた……丁度現在のテレビなどのように……そういう文学というものはあるのでしょうか？

1.1.4 貸本文化と大衆文学

江戸時代、本は決して安いものではありませんでした。現代は印刷技術が発達していますから、本は売れるものに関しては何十万部という単位で大量生産され、安価に販売されていますけれど、この時代は、本といっても、手で筆と墨で書いたものか、木版による印

*9 お笑い芸人「天津」の片われの木村という人が、ネタでよく「エロ詩吟」というのをやっていますが、その元ネタがこれです。余談ですが、あの人のお父さんは詩吟のお師匠さんなのだそうです。

刷で作られたものでした。ですから、一冊一冊に結構な手間がかかっている、その値段も安いものではなかったのです。

しかし、先の説明の通り、当時の世の中には結構な数の「本を読める人達」がいたわけです。ですから、そういう人達に本を貸して賃料を得る貸本屋が、江戸時代にはたくさんありました。大きな店を構えているところから、店を持たず、葛籠に本を入れたのを担いで商家を訪問しては、奉公人に本を貸すような「訪問貸本屋」まで、さまざまなものがあったと伝えられています。

では、そういった貸本屋では、どのような本が貸し借りされていたのでしょうか。

■**草双紙** 貸本屋で貸し借りされていた本の種類として、まず挙げられるのは「草双紙」と呼ばれる本です。草双紙は、さし絵の入った本で、もともとは子供向けの昔話などが題材とされていましたが、時代と共に、歌舞伎や浄瑠璃^{きょうりゅう}*10などから題材を得た大人向けのものが主流となりました。特に「黄表紙」と呼ばれるものは、大人向けのストーリーで、一部の作品は享乐的・退廢的であるとして取り締まりの対象にされました。

■**読本** 草双紙を卒業した人達を読むのが「読本」と呼ばれるものでした。これは今で言う小説のようなもので、漢文の読み下し文のような「格調ある」（しかし初心者にはとつきにくい）文体が特徴です。中国の白話小説^{はくわしやうせつ}*11を書き直したものや、白話小説の影響を受けた曲亭馬琴（『南総里見八犬伝』*12で有名）や山東京伝の作品が評判を呼びました。

■**洒落本** 貸本で流通した本の中で一番「やわらかい」のがこの洒落本です。別名「こんにやく本」*13などとも呼ばれます。内容は現在の本で言うハウツーもの（たとえば、遊廓での遊び方を教える本とか）や、江戸時代の風俗を面白おかしく書いたものでした。

■**滑稽本** 洒落本と読本の間に位置するのが滑稽本です。会話を主体としたやさしい文章で、単純な言葉の引っかけや常識を外れた滑稽な言動、下ネタなどで大衆的な読者の笑いを誘うストーリーものの本で、式亭三馬の『浮世床』*14や、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』*15などが有名です。

*10 三味線の伴奏に合わせて太夫が歌や台詞で情景を再現する音楽劇。

*11 白話小説で最も有名なものに『三国志演義』があります。中国の三国時代（魏・呉・蜀の三国が覇権を争った時代）を舞台とした時代小説ですね。

*12 武将里見義実の娘である伏姫と義実の飼犬である八房の因縁によって世に飛び散った八つの玉に導かれた八人の若者（八犬士）が里見家安泰のために尽くす……という、こう書いてみると無茶苦茶なストーリーの伝奇小説ですが、これは中国の『水滸伝』に刺激されて書かれたと言われています。

*13 「やわらかい」内容であることと、本が半紙を4つに等分したサイズで、丁度こんにやくと同じだったことからこう呼ばれます。

*14 床屋に来て暇潰しをしている客の男達の滑稽な話を書いた本です。

*15 弥次と喜多のコンビが江戸から伊勢神宮詣の旅をする様子を面白おかしく書いた本です。

以上のように、貸本を中心として、江戸時代の大衆文学は栄えていったわけです。また、このような文学の影響を受けた大衆芸能として「落語」を忘れてはいけません。落語は、漢文に近いような高尚なものから、黄表紙や滑稽本のような「やわらかい」ものまで、当時の大衆文学を敏感に取り入れて発展し、また当時の大衆文学にも影響を与えて共に栄えていたのです。

1.2 明治初期の大衆文学

1.2.1 印刷、新聞、そして連載小説

今まで長々と記してきたように、江戸時代には「文字を読み書きできる」大衆と、その大衆の娯楽^{ごらく}としての大衆文学が栄えていたわけですが、時代は江戸時代から明治時代に進み、政治体制が徳川幕府から明治政府と天皇制に移りました。では、明治に入って、大衆文学はどのように変わっていったのでしょうか。

文明開化に伴って、三つの大きな変化が日本社会にもたらされました。それは活版印刷の技術、新聞の普及、そして西欧文化の紹介と啓蒙^{けいもう}*16です。

日本でも、先に書いたように、木版による印刷技術はひろく用いられていました。しかし、文字を活字の組み合わせで表現し、活字を組み換えることで版を容易に作成・再利用できる活版印刷の技術は、印刷物を大量につくることを可能にしました。このような活版印刷の定着によって、いままで決して気軽に買えるものではなかった本は、現在程ではないにせよ、一般大衆でも何とか買うことのできるものになっていきました。

また、活版印刷の技術とともに普及したのが新聞です。もともと日本にも「瓦版^{かわらばん}」と呼ばれる新聞のようなものが存在していたのですが、明治維新とともに、1868年に『中外新聞』『江湖新聞』、1870年には日本最初の日刊紙である『横浜毎日新聞』、そして1872年には『東京日日新聞』*17と『郵便報知新聞』*18、1874年に『讀賣新聞』、1879年には『朝日新聞』が創刊されました。明治政府が、新聞が国民の啓蒙に役立つということで、新聞を役所で買い上げたり、郵便料金の優遇措置を講じたりして、事業を保護したことも手伝い、新聞は国民全体にひろく読まれるようになりました。

新聞は商業出版物ですから、当然、より多く買ってもらうための工夫が必要になります。明治初期の新聞は、現在のように報道の厳密性を追求するより、同じ事件でもより面白おかしく、時には恐ろしく、スキャンダルなども積極的に掲載し、人目をひく工夫がさ

*16 人々に正しい知識を与え、合理的な考え方をするように教え導くこと。

*17 現在の『毎日新聞』です。

*18 現在の『スポーツ報知』です。

れていました。とはいえ、新聞が新聞である以上、ちゃんとした報道というものが求められるわけで、明治政府は1875年に新聞紙条例、^{ひぼうりつ} 讒謗律を制定して新聞の言論弾圧に乗り出し、新聞は、政論中心で知識人を対象とした「大新聞」と娯楽中心で一般大衆を対象とした「小新聞」に分かれていきました。

各新聞社は、真面目なイメージを崩すことなく、販売部数を伸ばすための方策を必要としていました。日清・日露の各戦争における、いわゆる戦時報道で各新聞社は部数を伸ばしましたが、報道以外の面でも部数拡大を模索していました。海外では、新聞に小説が連載されることが既によくみられたのですが、明治の日本においても、各新聞社が小説連載を行うことが行われ、やがて新聞が大衆文学としての小説の大きな活躍の舞台となっていったのです。

では、活版印刷が一般的になり、新聞が定着した状況下で、世間ではどのような本が流通していたのか、というと、大衆娯楽としての本は、江戸時代のそれとあまり変わりませんでした。草双紙や読本、洒落本、滑稽本など（これらをひとまとめにして「^{げさく} 戯作」といいます）は、明治に入ってもひろく大衆に読まれていたのです。

しかし、文明開化と共に、西欧の文化と新しい知識を知るべきだ、知りたい、という^{きうん} 機運が高まりました。このような機運の中で、記録的なベストセラーになった本が、^{ふくざわ ゆきち} 福沢諭吉の^{あらわ} 著した『学問のすゝめ』です。この本に出てくる、

天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ人ノ下ニ人ヲ造ラズト云ヘリ*19

というくだりは、一度は耳にしたことがあるのではないかと思います。この本は1872年に初版が出てから8年間で約70万部、最終的には300万部も売れたのだそうです。当時の日本の総人口が約3000万人だそうですから、国民の10人に1人が買った、ということになります。

この『学問のすゝめ』は、17世紀後半からヨーロッパで主流となった^{けいもうしそ} 啓蒙思想*20の影響を強く受けているのですが、明治時代は、この本のような^{けいもうしよ} 啓蒙書が広く読まれるようになった時代でもあります。小説とは若干異なりますが、ひろく文学という括りで言うならば、これも明治時代の文学の特徴かもしれません。

*19 この一文はアメリカ独立宣言の “We hold these Truths to be self-evident, that all Men are created equal, that they are endowed, by their CREATOR, with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty, and the Pursuit of Happiness.”（訳：我らは以下の諸事実を自明なものに見なす。すべての人間は平等につくられている。創造主によって、生存、自由そして幸福の追求を含むある侵すべからざる権利を与えられている。）の引用です。

*20 合理的な思想に基いて、古く悪しきものを排除し、物事への理解を深め、正しい知識を世の中に広めていくことで、人や社会はより理想的なものになっていくことができる、とする思想。

1.2.2 明治の文体

さて、では、小説に話を戻しますが、明治時代の小説というのはどういうものだったのでしょうか。ここでは、新聞に連載された小説でも最も初期のもの、ということで、幸田露伴こうだろはんが明治25年（1892年）に新聞『国会』のために書いた『五重塔』ごじゅうのとうの出だしの部分を見てみましょう。

木理美もくめうるはしき 槻胴けやきどう、縁にはわざと赤檉あかぎを用ひたる岩畳がんでふ作りの長火鉢ながひばちに対ひて話し敵がたきもなく唯一人、少しは淋しみしさうに坐り居る三十前後さんじゅうごの女、男のやうに立派りっぺいな眉まゆを何日いつ掃はきひしか剃ひつたる痕あとの青と、見る眼まなこも覚おぼむべき雨あめ後の山やまの色いろをとめて翠みどりのひ一ひとつしほ床とこしく、鼻筋はなぢつんと通り眼尻まなこキリ、と上り、洗あらひ髪かみをぐる／＼と酷むごく丸まるめて引裂ひきちぎ紙しをあしらひに一本簪いつぽんざしでぐいと留とどめを刺さした色気いろけ無なの様ようはつくれど、憎にくいほど烏黒まっくろにて艶えんある髪かみの毛けの一ひとつ二ふたつ後あとれ乱みだれて、浅黒あさくろいながら渋気しぶけの抜ぬけたる顔かほにかゝれる趣おもむききは、年増としぞう嫌きらひでも褒ほめずには置おかれまじき風体ふうてい、我がものならば着きせてやりたい好みこのみのあるにと好色しれもの漢わんが随分ずいぶん頼たのまれもせぬ詮議せんぎを陰かげでは為なすべきに、さりとは外見みえを捨すて、堅義けんぎを自慢つくにした身みの装つり方かた、柄えらの選えら択みこそ野暮やまならね高たかが二子ふたごの綿わた入れいれに繻子すずこ襟えりかけたを着きて何所どこに紅べにくさいところもなく、引ひつ掛かけたねんねねんねこばかりは往時むかし何なになりしやあら疎あい縞まの糸いと織おなれど、此こゝとて幾度いくどか水みづを潜ひそつて来きた奴やつなるべし。

……あれれ？「明治以降が近代」と言っていたのに、今の我々が読むのにはあまりに骨が折れそうな文章ですね。そうなんです。明治時代まで、日本の文学作品というのは、たとえそれが大衆向けであっても、このような「文語体」と呼ばれる古い日本語で書かれていたのです。

1.2.3 文語体、七五調、講談調

文語体、というのは一体何なのでしょう。それは、上に引用した『五重塔』の出だしを音読してみると分かりやすいかもしれません。

もくめうるわしき けやきどう、
ふちにはわざと あかがしを もちいたる
がんだうづくりの ながひばちに むかいて
はなしがたきもなく ただひとり……

テンポ良く読める、と思いませんか？ 日本語では特に、文章を構成するまとまりが、七文字、あるいは五文字になっていると、日本語特有のリズムに乗せやすい、と言われていて、そういう風にかかれて^{しちごちよう}いる文章を「七五調」といいます。

日本語における七五調の歴史は非常に古いものです。たとえば、鎌倉時代に成立したと言われている『平家物語』を見てみましょう。この『平家物語』というのは、琵琶法師と呼ばれる盲目の僧侶が、琵琶という和楽器をかき鳴らしながら語る「語り本」^{かた ほん}としてよく知られています、

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり
 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理を表す
 驕れる者も久しからず ただ春の夜の夢の如し
 猛き人も遂には滅びぬ 偏に風の前の塵に同じ

これを音読すると……

ぎおんしょうじゃの かねのこえ しょぎょうむじょうの ひびきあり
 さらそうじゅの はなのいろ じょうじゃひっすいの ことわりをあらわす
 おごれるものも ひさしからず ただはるのよの ゆめのごとし
 たけきひとも ついにはほろびぬ ひとえに かぜのまえの ちりにおなじ

一部文字数の違う部分もありますが、これもやはり基本的には七五調であることが分かります。

このように、日本においては、人が声を出して語る文学の伝統があるわけです。それは江戸時代においては、先に出てきた浄瑠璃だったり、講談^{*21}だったりしたわけで、そういう文章の調子を聞き慣れた一般大衆は、書き言葉の上にも聞き慣れた調子を求めたわけです。ですから、江戸時代から明治にかけての大衆文学の多くが、このような「文語体」「講談調」の文体で書かれていたわけなのです。

1.2.4 「文語体」「講談調」という呪縛

しかし、この「文語体」「講談調」、日本の書き言葉においては大きな呪縛^{じゅばく}^{*22}でもあったのです。どういうことか、というと、たしかに文語調や七五調は聞いた感じがいいのですが、人々が普段の生活の中で喋^{しゃべ}っていた言葉は、そのように整えた言葉ではなかったのです。たとえば、先に出てきた十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を見てみると、弥次と喜

*21 演者が高座におかれた枳台（しゃくだい）と呼ばれる小さな机の前に座り、張り扇でそれを叩いて調子を取りつつ、軍記物や政談など主に歴史にちなんだ読み物を、観衆に対して読み上げる芸能。

*22 自由を奪い、縛りつけるようなもの。

多が喋っている場面はこんな感じです。

伊勢参りの小僧「旦那さま。一文くれさい」
 弥次「やろうとも。手めえはどこの者だ」
 小僧「わしらア奥州」
 喜多「奥州はどこだ」
 小僧「笠に書いてあり申す」
 弥次「奥州信夫郡幡山村長松……、ムム幡山の長松か。おいらも手めえたちの方に居たもんだ。幡山の与次郎兵衛どのは達者でいるか」
 長松「与次郎兵衛と言う人は知り申さない。与太郎どんなら、わしらが隣さアにあり申す」
 弥次「おお、その与太郎よ。またその家に、のん太郎と言う年寄りの爺いさまがあるはずだ」

……まあ、古臭い感じではありますけれど、現在の我々からみても、これは時代劇でお目にかかりそうな話し言葉です。ここで注目すべきことは、これが文語体でも、講談調でもないということです。

つまり、「文語体」「構文調」という「書き言葉、語り言葉の様式」は、普通に話し、聞いていた「話し言葉の様式」と違うものだった、ということなのです。それが「書き言葉」に求められていたマナーだったのだ、と言ってしまえばそれまでですけど、我々が普段思い、口にし、そして耳にする言葉の直截^{ちよくせつ}*23さを、そういった書き言葉は、様式を重んずるあまりに、部分的であれ失っているのではないか……そういう疑問を抱く人々が、明治になってから現れたのです。

1.3 言行一致運動と口語体

こうした問題が指摘されるようになってから、日本の文学のスタイルは劇的に変化しました。その原動力となったのが「言行一致運動」と「口語体」の登場です。そこに至るまでの動きを見ていくことにしましょう。

1.3.1 坪内逍遙とその主張

近代日本で、上に書いてきたような書き言葉の問題点を最初に指摘^{してき}したのは、坪内逍遙^{つぼうちしょうよう}という人です。坪内は、26歳のとき（1885年－1886年）に文芸評論『小説真髓』^{しょうせつしんずい}上下

*23 まわりくどくなく、きっぱりしていること。ときどきこれを「ちよくさい」と読む人がいる——困ったことに学校の先生でも時々いるんですが——なのですが、それは誤りです。「ちよくせつ」が正しい読みです。

巻を発表しました。この『小説真髓』という題名は、「小説の真髓とは何か」つまり、小説にとって大切なことは何なのか、ということの意味しているのですが、この中で坪内は、こう主張しました。

小説の^{しゆのう}主脳は^{にんじょう}人情なり、^{せたいふうぞく}世態風俗これに^つ次ぐ。

つまり、小説で重要なのは「人情を描くこと」「世の中の様子や風俗を描くこと」の二つである、と規定したのです。より分かりやすく言うならば、

小説はまず、人の心の動きを描くべきである。そしてその人が居る世の中の様子、そしてその世の中での人の暮らしの^{ありさま}有様を描くべきである。

ということでしょうか。

そして坪内は、明治に入ってからの日本文学がどのようなものだったのか、ということを考えます。我々も、ここに至るまで、明治以前の日本の文学がどのようなもので、明治に入ってからはどうだったのか、を見てきましたけれど、それを思い返してみると……

1. 日本の文学は中国の文学の影響を強く受けている
2. 江戸時代以来、漢詩や詩歌、そして貸本屋で貸し出されていたような戯作がひろく大衆に読まれていた
3. 明治に入り、活版印刷の普及とともに新聞がひろく読まれるようになった
4. 同じく明治に入ってから、西欧の啓蒙思想の影響を受けた啓蒙書が読まれるようになった

と、こんな感じでしょうか。

では坪内の結論がどうだったのか、というと、実は、

日本文学は、江戸の戯作の流れを汲む戯作文学か、西洋の思想・風俗を伝え啓蒙するための政治小説が中心で、道徳や功利主義的な面のみが重視されている。文学作品においてはむしろそういうものを排除して、心理的な事物を客観的、かつ写實的に描くべきである。

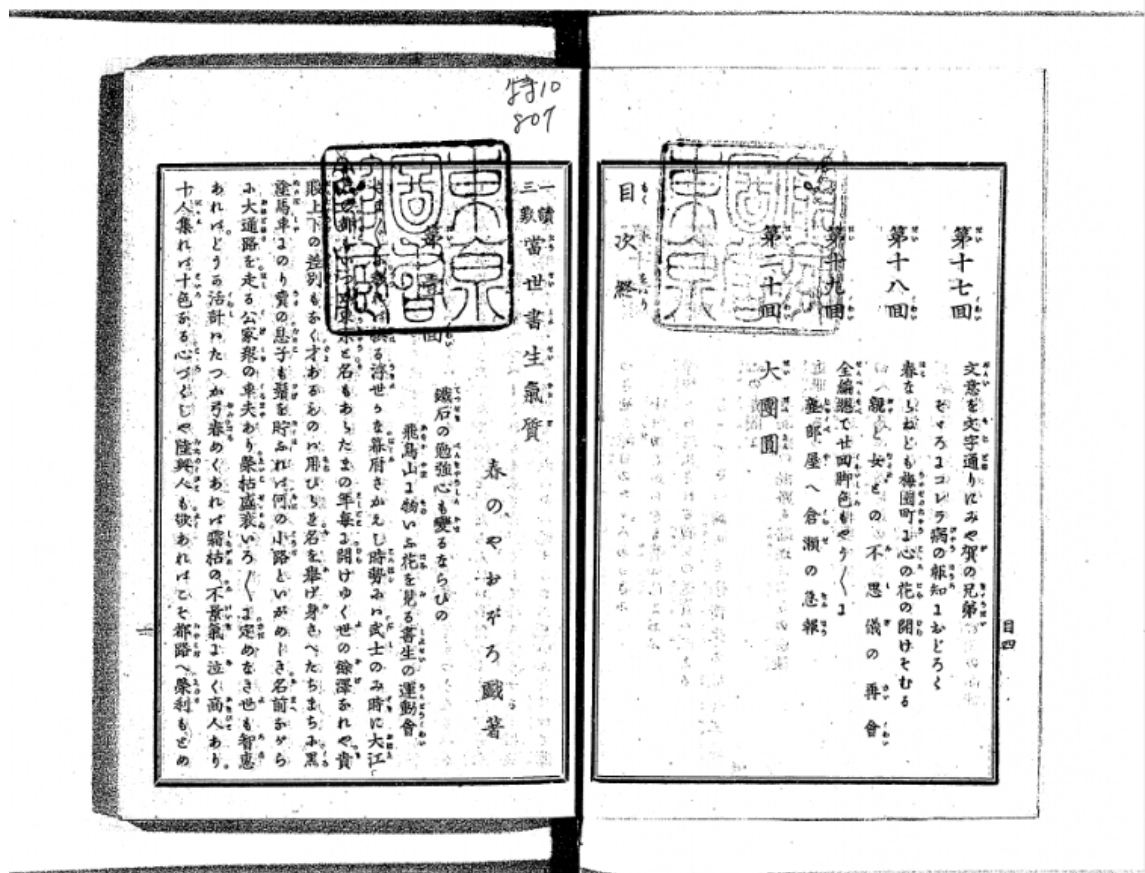
というものだったのです。つまり、我々が見てきた通りのことを、坪内も感じていた、ということなのです。誤解を恐れずに書き直すなら、坪内は、こう言っているわけです：

文学は人間を描くことこそが一番大事なことで、別に道徳的かどうか、とか、それが実生活の役に立つかどうか、なんてことはどうでもいいんだ。人の心に関わることを冷静に、リアルに描くことが一番大事なんだ！

この坪内の主張こそが、明治の小説の姿を変えていったのです。

1.3.2 越えられない壁

坪内逍遙は、明治18年から19年（1885年 - 1886年、つまり『小説真髓』とまさに同じ時期なわけですが）にかけて、彼の思索を反映させた小説『当世書生気質』を「春のやおぼろ」名義で発表しました。



『当世書生気質』初版本

書生（大学生）と芸妓の恋愛を中心に、明治初年の書生社会の風俗と気質を写實的に描写することを狙ったこの作品は、世に好意的に受け入れられ、明治時代を通じたロングセラーとなりました。これに関しては、こんなエピソードがあります。

明治31年（1898年）、伝染病研究所（現・東京大学医科学研究所）に勤め出した22歳の新人医師がいました。彼の名は野口清作のぐちせいさくといったのですが、野口は知人からすすめられ、『当世書生気質』を読んだところ、弁舌べんぜつを弄し借金を重ねつつ自堕落な生活を送る登場人物・野々口精作のぐちせいさくが彼の名前によく似ていることに大きな衝撃を受けました。彼自

身、借金を繰り返して遊郭などに出入りする悪癖があったことから、この小説に登場する野々口精作なる人物が、まるで自分をモデルにしたものであるかのように感じたのです。野口は改名を決意し、郷里の後援者に相談して、世にすぐれるという意味の「英世」を新たな名として名乗るようになりました。もちろんこれは、現行の千円札の肖像画*24になっている、あの医学者・野口英世のことです。

それはさておき、この『当世書生気質』において、坪内は様々な実験をしています。登場人物の会話は実際の会話をそのまま書き取ったようだし、登場人物同士の交流も、単一の主人公を中心にしたものではなくて、同時進行的に複数の人物の話が並行する、といった具合で、たしかにこれらは既存の講談調の小説にはなかったものです。しかし、後世の評価としては、「小説家としての坪内は評論家としての彼が指摘した壁を越えられなかった」ということで一致しています。

『当世書生気質』の文章を上画像から辿ってみると分かるのですが、文章の基本的な語り口は依然として講談調、もっと率直に言うならば「戯作文学風」のままです。現在の小説のように、著者自身が読者に語りかけるような筆致には、まだ遠く離れたものだとわざるを得ません。それは、先に我々が至った結論：

「文語体」「構文調」という「書き言葉、語り言葉の様式」は、普通に話し、聞いていた「話し言葉の様式」と違うものだった

これです。「リアルに描くことが一番大事なんだ！」とか言っていたのに、いざ自分が小説を書くときには、世間の人々が慣れ親しんだ戯作文学の影響を排除し切れない……これこそが、坪内が越えられなかった壁なのです。

1.3.3 二葉亭四迷と言文一致運動

この「壁」を越えるためにはどうしたら良いのか。この問題に挑戦したのが、坪内と同郷の後輩である二葉亭四迷です*25。

四迷は、「言文一致」ということを考えていました。これはまさに、「書き言葉、語り言葉の様式」と「話し言葉の様式」の一致、ということです。そこで四迷が参考にしたのが、実は落語なのです。

落語は生きた言葉の芸能です。様々な登場人物が、リアルな言葉で会話するところが、

*24 この前の千円札の肖像画は、まさにかの夏目漱石のものなのです。

*25 この人、妙な名前（もちろんペンネームなのですが）ですけれど、これは彼が文筆で身を立てる、と父親に言ったとき、怒った父親に「くたばってしまえ」と怒鳴られたのを振って、こんな名前にしたのだそうです。

落語の面白いところです。「言文一致」という言葉が出てくるはるか前から、落語家はこの問題を意識していました。ですから、四迷がリアルな言文一致の雛形^{ひながた}として落語に注目したのは、これは実にいいところに目をつけたということなのです。

しかし、落語を参考にするためには、大きな問題がありました。たとえば講談などには底本^{ていほん}、つまり芝居で言う台本に相当する本があって、この底本に節をつけて読んでいるわけです。ですから、講談の文章を学びたいければ底本を読めばいいわけです。しかし、落語は口伝^{くでん}の芸能です。つまり、師匠から弟子には口伝で落語が受け継がれ、それに更にアレンジを加えたものを個々の落語家は演じています。だから、落語の文章を学ぶための本、というものは、もともと存在しないのです。

現在は、録音ということが簡単にできますから、録音しておいて文字に直した落語を簡単に本で読むことができますけれど、明治時代には、録音などということは到底できなかったはずです。

しかし、この時代にひとつの記録技術が世に出てきます。それは速記^{そっき}です。速記というのは、言葉を簡単な符号にしてリアルタイムで紙に書き取り、記録する技術のことですが、国会などでの答弁を記録するために、日本語でもこの速記の方法が確立され、使われ始めていました。

落語家でも、この速記に注目した人がいました。それは、当時、当代一の名手^{うた}と謳われた、初代三遊亭圓朝^{さんゆうていえんちよう}です。落語家は、自分のネタを盗まれたり、自分の望まないかたちで人目に触れたりするのを嫌うものなのですが、圓朝は、自分の落語を速記で記録して、新聞に掲載することを、落語家として初めて許可しました。この落語の新聞連載というのは非常に好評で、その一部は現在も読むことができます。たとえば、圓朝の演目でも最も人気の高かった『文七元結^{ぶんしちもとゆい}』の冒頭部を見てみましょう：

さてお短いもので、文七元結^{ぶんしちもとゆい}の由来という、ちとお古い処^{ところ}のお話を申し上げますが、只今^{ただいま}と徳川家時分^{じぶん}とは余程^{よほど}様子の違いました事で、昔は遊び人というものがございましたが、只遊^{ただ}んで暮して居ります。よく遊んで喰^くって往かれたものでございます。何うして遊んで暮しがついたものかという、天下御禁制^{ごきんせい}の事を致しました。只今ではお厳^{やかま}しい事でございまして、中々隠れて致す事も出来んほどお厳しいかと思ひますと、麗々^{れいれい}と看板を掛けまして、何か火入れの賽^{さい}がぶら下って、花牌^{はなふだ}が並んで出ています、これを買^{みせさき}って店頭^{おもてむき}で公然^{たのし}に致しておりまして、楽^{たのし}みを妨^{さまた}げる訳はないから、少しもお咎^{とが}めはない事で、隠れて致し、金を賭けて大きな事をなさり、金は沢山あるが退屈^{たいくつ}で仕方がない、負けても勝^かっても何うでも宜^よいと、退屈しのぎにあれをして遊んで暮そうという身分のお方には宜^{よろ}しゅうございますが、其の日暮しの者で、自分が働^{はたら}きに出なければ、喰^くう事が出来ないような者がやりますと、自然商売^{おろそか}が疎^{よくとく}になります。慾徳^あずくゆえ、倦^あきが来ませんから勝負を

致し、今日で三日続けて商売に出ないなどということで、何うも障りになりますから、^{やかま}厳しゅう^{おっ}仰しやる訳で、併し^{しか}賭博を致したり、酒を飲んで^{なまけもの}怠惰者で仕方がないというような者は、何うかすると良い職人などにあるもので、仕事を精出して^し為さえすれば、大して金が取れて立派に暮しの出来る人だが、^{おし}惜い事には怠惰者だと云うは腕の^よ好い人にございますもので……

四迷は、この新聞に掲載された速記落語に注目しました。そこにはまさに、話し言葉の生き生きとしたやりとりがそのまま記録されていたのです。四迷はこの落語の語り口を学びながら新しい小説の執筆に挑みました。そして、1887年（明治20年）に、処女作である『浮雲』を発表したのです。『浮雲』冒頭部から、その一部を見てみましょう。

ト高い男は顔に似気なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手軽るく、別れて独り小川町の方へ参る。顔の微笑が一かわ一か消え往くにつれ、足取も次第々々に^{ゆるや}緩かになって、終には虫の^は這う様になり、^{しよんぼり}悄然と頭をうな垂れて二三町程も参った頃、不図立止りて四辺を回顧し、^{がいぜん}駭然として二足三足立戻って、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ^{はい}這入る。一所に^{いっしょ}這入って見よう。

高い男は玄関を通り抜けて縁側へ立出ると、^{かたわら}傍の坐舗の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、^{つまみ}チョンボリとした摘ッ鼻と、^{ばな}日の丸の紋を染抜いたムツクリとした頬とで、その持主の身分が知れるという奴が、ヌット出る。

「お帰なさいまし」

トいって、何故か口舐ずりをする。

「叔母さんは」

「先程お嬢さまと何処らへか」

「そう」

ト言捨てて高い男は縁側を^{つたわ}伝って参り、突当りの^{だんぼしご}段梯子を登って二階へ上る。ここは六畳の小坐舗、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になっている。床に掛けた軸は^{すみずみ}隅々も既に虫喰んで、^{とこばないけ}床花瓶に投入れた二本三本の^{えぞぎく}蝦夷菊は、うら枯れて枯葉がち。坐舗の一隅を顧みると古びた机が一脚据え付けてあって、筆、ペン、^{ようじ}楊枝などを^{つかみぎ}掴挿しにした筆立一個に、^{はみがき}歯磨の函と^{はこ}肩を比べた^{あかま}赤間の硯が一面載せてある。机の^{かたわら}側に押立たは二本立の^{だち}書函、これには小形の^{ランプ}爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の^{ふち}欠けた火入、これには摺附木の^{すりつけぎ}死体が^{よこたわ}横っている。その外坐舗一杯に敷詰めた^{ケット}毛団、^{えもんだけ}衣紋竹に^{あわせ}釣るした^{くぎ}袷衣、柱の釘に懸けた^{てぬぐい}手拭、いずれを見ても皆年数物、その証拠には^{てず}手擦れていて^{そうぜん}古色蒼然たり。だが^{おのずか}自ら^{とりかたづい}秩然と取旁付ている。

まだ講談調の口調が残っていますが、先の落語の口調にかなり近い感じですが、このように

して、日本の文学に初めて言行一致が、そしてその手段としての「^{こうごたい}口語体」が導入されたのです。

1.3.4 口語とは何か

そもそも「口語」とは何なのでしょう。手元の辞書『大辞泉』でひいてみると、こう書いてあります。

1. 日常の談話などに用いられる言葉遣い。話し言葉。口頭語。音声言語。⇔文語。
 2. 明治以降の話し言葉と、それをもとにした書き言葉とを合わせていう。⇔文語。
- ◆明治以前の言葉についても、それぞれの時代の話し言葉ならびにそれをもとにした書き言葉を口語ということがある。

これに対して、「文語」を同じ『大辞泉』でひいてみると、こう書いてあります。

1. 話し言葉に対し、文字に書かれた言葉の総称。書き言葉。文字言語。⇔口語。
2. 文章を書くときに用いられる、日常の話し言葉とは異なった独自の言葉。特に、平安時代語を基礎にして独特の発達をとげた書き言葉をいう。⇔口語。

これらの説明は、今まで我々が（長々と）見てきた日本語の^{へんせん}変遷をそのまま表しています。

つまり、奈良時代から平安時代に仮名文字が出現し、仮名文字で書く日本語の書き言葉が出てきたわけですが、これを文語と言うわけです。ここで注目すべきなのは、文語は「平安時代語を基礎にして独特の発達をとげ」、しかも「日常の話し言葉とは異なった独自の言葉」だ、ということです。

そして、明治時代に、文語と話し言葉の間の不一致が指摘され、「明治以降の話し言葉」から、「それをもとにした書き言葉」が作られたわけですが、これを口語と言うわけです。

このようにして、明治時代にはじめて、我々が普段本（や国語の問題）で目にしている、日本語の書き言葉が確立・定着したわけです。

1.4 なぜこんなにも長い旅をしなけりばならなかつたのか

長かったですね。でも、これでも、言葉の^{へんせん}変遷というものの全体の中では、ほんの一部しか見ていないのです。本当は、もっと様々な言語文化が、この明治までの間に花開いたわけですが、ここでは特に小説（昔は「小説」という言葉も存在していませんでしたから「話」とか「物語」とか書くべきかもしれせんけれど）に限定して、言葉を^{めぐ}巡る二千年近くもの長い時間の^{たびじ}旅路を辿り、ようやく、明治時代に、我々の「普通の」言葉で書かれた小説にたどりついたわけです。

さて、最初に、我々は何を求めて旅を始めたのでしょうか？ そう、夏目漱石でしたね。なぜ漱石の小説を読むために、こんなに長い旅をしなければならなかったのでしょうか？

その理由として、まず、夏目漱石が「口語体文学」を定着させる上で重要な意味を持つ作家だ、ということが挙げられます。漱石は、処女作の『吾輩は猫である』から、絶筆*26となった『明暗』まで、一貫して口語体で小説を書きました。これは同時代の作家、特に漱石と並び称される大作家である森鷗外と比較したとき、実に特徴的なことです。

次に、漱石は口語体で文章を書いていたわけですが、その作品には、幼少時から親しんだ漢文や古文、そして彼の専門であった英語とイギリスの影響が色濃く見えます。当時、すでに伝統的なものであった漢文や古文と、当時の最先端であった英語文化の双方から影響を受けている、ということは、それが口語体で書かれていても、先に挙げた戯作や啓蒙文学の影響が、そこに色濃く見てとれるということです。

そして、漱石が当時まだ珍しかった専業作家であったこと、特に、彼の創作を発表するメインの場が新聞であったことが挙げられます。明治以降に普及した活版印刷と新聞こそが、夏目漱石という人の活動において不可欠なものであったこと、これは漱石という人とその作品を知る上で重要なことです。

以上のことに関して、ここまで一通り見てきたことを思い返していただきたいのですが、まさにこれらのことを理解するために、我々はこの長い時間の旅を通して、漱石の形成要因を確認してきたわけです。さあ、準備は整いました。これから、夏目漱石という人について、見ていくことにしましょう。

*26 作家の最後の作品。特に、その作品を執筆中に亡くなった場合に、その作品を絶筆といいます。